

# 障害者支援施設における自閉症者に対する余暇支援の有効性

- 生活支援員に対する質問紙調査を通して -

松 山 郁 夫

Effectiveness of Activity Support for the Leisure Activity of Persons with Autism in a Support Facility for Disabled: From a Questionnaire Survey of Life Support Staff

Ikuo MATSUYAMA

## 要 旨

本研究の目的は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者への余暇支援の有効性に対する捉え方、及び余暇支援に対する認識を明らかにすることである。このため、自閉症者が入所している障害者支援施設の生活支援員を対象に、自閉症者への余暇支援の有効性に対して意識する程度、及び余暇支援に対する喜び、達成感、満足感の程度を問う、独自の質問を記載した質問紙票によるアンケート調査を実施し、有効回答がなされた173人の回答を分析対象とした。質問項目について因子分析を行った結果、余暇支援の有効性に対して、第1因子「個人に応じた支援」、第2因子「地域資源による支援」、第3因子「意義のある支援」の3因子構造があり、これらは自閉症者に対する余暇支援の有効性を捉えるための視点と考えた。また、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、「個人に応じた支援」「意義のある支援」「地域資源による支援」の順に効果があるとの認識が示唆された。さらに、重回帰分析によって「自閉症者への余暇支援における満足感」に対して「個人に応じた支援」が有意な影響を及ぼしていると考えた。

Key words : 自閉症者、障害者支援施設、生活支援員、余暇支援

## I . はじめに

現在、自閉症については、米国精神医学会（American Psychiatric Association: APA）における「精神障害の診断・統計マニュアル第4版」（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th Edition: DSM-IV, 1994）で、自閉性障害として記述されており、①相互的対人関係における障害、②意志伝達の障害、③行動・興味及び活動の限定された反復的で常同的な様式、の3領域における特徴が生後3年以内に発現

する発達障害と定義されている<sup>1)</sup>。

自閉症の基本的な障害として、言語障害、前後関係の理解の障害、抽象の障害、コード化の障害の4つが指摘されている(Rutter & Shopler 1978)<sup>2)</sup>。自閉症児にも達成感情はあるが、その感情を自発的に他者と共有したり、誇示しようとしたりする誇りが欠けているとされている(Kasari, Sigman, Baumgartner, & Stipek 1993)<sup>3)</sup>。また、こだわり等周囲に理解できない行動があり、状態像を捉えることに困難さもあって、自閉症に対する周囲の理解が進まない<sup>4)</sup>。さらに、自閉症者は、青年期・成人期になっても他者との円滑なコミュニケーションをとることができないため、常時、社会適応上の問題を持っている。

自閉症はコミュニケーション障害を主症状とし、対人関係形成に著しい困難を示す。また、自閉症のおよそ75%に知的障害が認められる<sup>5)</sup>。青年期・成人期に達した自閉症者で知的障害を併せ持つ場合、地域における自立生活が困難なことが多く、自閉症者の親が高齢になると障害者支援施設(旧体系における知的障害者更生施設)等の福祉施設に入所せざるを得ない現状がある。日本では、1981年に自閉症者施設が開設されたが、知的障害者福祉制度を活用したもので、自閉症に対する独自の枠組みで制度化されたものではなかった。現在、旧体系での知的障害者更生施設は、2006年4月に施行された障害者自立支援法第5条に定義される「障害福祉サービス」の中で主に「施設入所支援」として位置づけられ、「障害者支援施設」とされている。障害者自立支援法による指定を受けて「指定知的障害者支援施設」と呼ばれることになる。

知的障害者更生施設は2012年(平成24年)3月末までに新しい障害福祉サービス体系に移行しなければならない。2011年度に全国自閉症者施設協議会には67施設が登録しているが、そのうち48施設(71.6%)は入所タイプの障害者支援施設(旧体系における知的障害者更生施設)となっている。これらには、自閉症者のQOLの向上を目指す積極的行動支援が求められる。したがって、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症者との人間関係の交流を通して園生活の充実を図るための余暇活動への支援に対する評価を行う必要がある。このため、生活支援員が自閉症者に対する余暇支援の有効性をどのように捉えているのか、また自閉症者に対する余暇支援を行った結果、どのような認識を持てたのかを明らかにすることが求められる。

以上のことから、本研究の目的は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者に対する余暇支援の有効性、及び余暇支援に対する認識を明らかにすることとする。

## Ⅱ．方 法

### 1．調査期間と調査方法

平成23年2月22日から同年3月21日までの約1か月間を調査期間とした。全国自閉症者施設協議会の会員施設から無作為に選んだ障害者支援施設(旧体系の知的障害者更生施設)30か所に、無記名で独自の質問紙調査票を郵送により配布し、後日各々の障害者支援施設から郵送により回収した。合計14か所から回答が得られた。なお、倫理的配慮として回答への記入は無記名で行った。さらに、回収された質問紙票について分析を行う際すべて数値化する旨、回答を依頼する説明文に付記し、回答をもって承諾が得られたこととした。

### 2．調査項目と分析対象

調査対象は、全国自閉症者施設協議会の会員施設となっている入所形態の障害者支援施設に勤務する生活支援員とした。

合計189人の回答のうち自閉症者に関わった年数が1年以上の生活支援員で、全項目に回答したアンケートを有効とした。有効回答率は91.5%（173人）であり、生活支援員173人を分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類・施設の形態を付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

性別については、男性98人（56.6%）、女性75人（43.4%）であった。

年齢については20歳から67歳まであり、平均35.2歳（SD=9.8）であった。

自閉症者に関わった年数は1年から29年まであり、平均7.0年（SD=5.8）であった。

施設の形態については、173人全員が入所形態の障害者支援施設に所属していた。

分析対象者173人全員が、主に関わっている対象者の時期については青年期と成人期、主に関わっている対象者の障害種類については知的障害のある自閉症であった。

### 3. 内容と分析方法

予備調査として、障害者支援施設で自閉症者の生活支援経験がある生活支援員5人に、自閉症者の余暇支援をする際に留意していることを尋ねた。その結果、複数回答のあった内容を質問項目とし、自閉症者の余暇を支援するときに行っている普段の対応における、自閉症者自身の余暇の過し方に対する有効性を問う項目からなる質問紙票を作成した。

方法は質問紙法による。質問紙には、自閉症者の余暇を支援するときに行っている普段の対応における、自閉症者自身の余暇の過し方に対する有効性の度合いを、「まったく役に立っていない」（1点）、「あまり役に立っていない」（2点）、「どちらとも言えない」（3点）、「ある程度役に立っている」（4点）、「かなり役に立っている」（5点）の5件法で質問した。その際、各質問項目に1～5の数字を等間隔に配置して、当てはまる数字に を付けるようにした。なお、質問項目は42項目とした（表1）。

以上の質問項目について、自閉症者の余暇を支援するときに行っている普段の対応における、自閉症者自身の余暇の過し方に対する有効性の認識の特徴を捉えるために、各質問項目の平均値と標準偏差を算出するとともに、Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。さらに、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

また、生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援することをどのように認識しているのかを明らかにするために、「自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度喜びを感じているのか」、「自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度達成感があるのか」、「自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度満足感があるのか」の3つの質問項目を設けた。これら3項目について、「まったくない」（1点）、「あまりない」（2点）、「どちらとも言えない」（3点）、「ある程度ある」（4点）、「かなりある」（5点）までの5段階評価とした。

これら3項目と、青年期・成人期の自閉症者への対応の有効性に対する意識の程度を問う独自の42項目の質問項目に関する因子分析で得られた各因子との間で、重回帰分析を行った。その際、各因子の下位尺度得点が自閉症者への余暇活動を支援することに対する喜び、達成感、および満足感に与える影響を検討するために、各因子を独立変数、自閉症者への余暇活動を支援することに対する喜び、達成感、および満足感を問う3項目を従属変数として重回帰分析を行った。

### Ⅲ．結 果

各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は2.49（「18.10人以上の集団による余暇活動を取り入れること」）で、最大値は3.92（「25.個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと」）であった。全42項目中、9項目が2点台（21.4%）、33項目（78.6%）が3点台であった。

これら42項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.86であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値3483.20  $p < .01$ ）。このため、42項目については因子分析を行うのに適していると判断し、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、18.65、3.08、1.85、1.49、1.25、……というものであり、スクリープロットの結果からも3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を除外し、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。これらの38項目について Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.94であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗4975.74  $p < .01$ ）。Promax回転後の最終的な因子パターンは表2の通りで、回転前の3因子で38項目の全分散を説明する割合は58.15%であった。

各因子のCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、第1因子に関しては $\alpha = 0.96$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.91$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.85$ であり、全項目で0.97と高い値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、高い内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること」、「余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること」、「余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」、「利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと」など、主として自閉症者の意思、興味や個人差を考慮した余暇支援に関する内容を内容としていたため、「個人に応じた支援」と名づけた。第2因子は、「余暇活動にボランティアを活用すること」、「地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること」、「地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること」など、主として地域の社会資源を活用した余暇の支援を内容としていたため、「地域資源による支援」と名づけた。第3因子は、「余暇を過ごす技能を獲得すること」、「文化的な余暇活動を行うこと」、「集団での余暇活動の楽しさを味わうこと」など、主として余暇活動が意義のあるように図っていくことを内容としていたため、「意義のある支援」と名づけた。

因子別の平均値（標準偏差）は第1因子3.83（SD：0.72）、第2因子2.90（SD：0.72）、第3因子3.24（SD：0.64）であった。各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、3因子の平均値間には有意差が認められた（表3）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、すべての因子の平均値間に有意差が認められた。このため、生活支援員は自閉症者に対する余暇支援について、第1因子「個人に応じた支援」、第3因子「意義のある支援」、第2因子「地域資源による支援」の順に効果があると認識していることが示唆された（表4）。

「質問A：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度喜びを感じているのか」平均4.18（SD：0.69）、「質問B：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度達成感があるのか」平均3.67（SD：0.80）、「質問C：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度満足感があるのか」3.64（SD：0.81）であった。

生活支援員における自閉症者の余暇を支援するときに行っている普段の対応が、自閉症者自身の余暇の過ごし方に対する有効性に関連する因子について、独立変数である第1因子「個人に応じた支援」、第2因子「地域資源による支援」、第3因子「意義のある支援」と、「質問A：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度喜びを感じているのか」、「質問B：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの

程度達成感があるのか」、「質問C：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度満足感があるのか」の3項目を従属変数とした重回帰分析によって、第1因子「個人に応じた支援」から「質問C：自閉症者の余暇活動を支援することに対してどの程度満足感があるのか」に対する標準偏回帰係数に有意な関連があった（表5）。

**表1 自閉症者への余暇支援の有効性に対する意識についての平均値と標準偏差**

質問項目	平均	標準偏差
1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること	3.85	.856
2. 余暇活動を継続的に行うこと	3.73	.829
3. 文化的な余暇活動を行うこと	3.03	.895
4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと	3.49	.912
5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと	2.99	.934
6. 余暇を過ごす技能を獲得すること	3.18	.889
7. 余暇活動を計画的に行うこと	3.54	.889
8. 余暇活動を支援するプログラムをすること	3.42	.947
9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと	3.75	.905
10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること	2.99	.967
11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること	2.71	.907
12. 余暇の過ごし方の技能を高めること	3.05	.875
13. 4～5人程度の小グループによる余暇活動を取り入れること	3.01	.918
14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること	3.82	.840
15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと	3.74	.913
16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること	3.93	.867
17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと	3.42	.808
18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること	2.49	.938
19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をする	2.95	1.041
20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること	3.18	.958
21. 利用者がさまざまな余暇活動を経験できるようにすること	3.49	.958
22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること	3.80	.882
23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと	3.68	.907
24. 余暇活動の場所を確保すること	3.54	.961
25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと	3.92	.905
26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること	3.87	.862
27. 年齢に合わせた余暇活動を行うこと	3.28	.899
28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること	2.92	.915
29. 余暇活動にボランティアを活用すること	2.76	.992
30. 余暇活動の内容が理解できるようにすること	3.33	.916
31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をする	2.67	.995
32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること	3.42	.877
33. 余暇活動の種類を増やすこと	3.31	.886

34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること	3.39	1.009
35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること	2.82	1.089
36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること	3.57	.986
37. 余暇活動について利用者が楽しかったかどうかを表現すること	3.29	.828
38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること	3.89	.879
39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと	3.16	1.048
40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること	3.03	1.061
41. 余暇の過ごし方に関する個別支援プログラムを作成すること	3.37	1.018
42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること	3.87	.900

表2 自閉症者への余暇支援の有効性に対する意識についての因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
<b>第1因子「個人に応じた支援」</b>			
42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること	.890	-.004	-.120
22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること	.835	-.016	.030
16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること	.826	-.066	-.065
23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと	.791	.031	-.019
15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと	.773	.000	-.022
25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと	.771	.046	-.063
9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと	.765	-.009	-.010
14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること	.765	.031	-.020
38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること	.756	-.150	.178
36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること	.742	.266	-.178
26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること	.715	.024	.093
1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること	.590	-.002	.192
8. 余暇活動を支援するプログラムを作ること	.574	-.109	.351
2. 余暇活動を継続的に行うこと	.540	-.242	.465
24. 余暇活動の場所を確保すること	.533	.287	.076
41. 余暇の過ごし方に関する個別支援プログラムを作成すること	.512	-.012	.332
32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること	.478	.239	.056
20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること	.458	.294	.033
33. 余暇活動の種類を増やすこと	.428	.266	.088
21. 利用者がさまざまな余暇活動を体験できるようにすること	.415	.394	-.005
<b>第2因子「地域資源による支援」</b>			
29. 余暇活動にボランティアを活用すること	-.052	.851	-.028
19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をする	-.039	.797	-.034
31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をする	.010	.682	.024
28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること	.060	.655	.111
35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること	.238	.623	-.105

11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること	- 236	589	357
18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること	- 307	518	403
39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと	312	509	- 036
40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること	293	495	027
34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること	348	462	- 015
10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること	265	404	097
<b>第3因子「意義のある支援」</b>			
6. 余暇を過ごす技能を獲得すること	.065	.108	.618
3. 文化的な余暇活動を行うこと	- .052	.291	.572
5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと	- .303	.375	.560
4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと	.225	.098	.485
7. 余暇活動を計画的に行うこと	.441	- .113	.482
17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと	.324	- .213	.454
12. 余暇の過ごし方の技能を高めること	.218	.171	.454

表3 自閉症者に対する余暇支援の有効性における分散分析の結果

区 分	平方和	自由度	平均平方	F 値
余暇支援	76.98	2	38.49	261.29*
被調査者	198.86	172		
誤 差	50.68	344	0.15	

\* p &lt; .05

表4 自閉症者に対する余暇支援の有効性における多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「地域資源による支援」	第3因子「意義のある支援」
第1因子「個人に応じた支援」	.933*	.589*
第2因子「地域資源による支援」		.344*

\* p &lt; .05

表5 生活支援員の自閉症者への余暇支援に対する評価に関連する因子標準偏回帰係数(β 値)

項 目	喜 び	達成感	満足感
第1因子「個人に応じた支援」	.087	- .217	.306*
第2因子「地域資源による支援」	- .083	- .159	- .105
第3因子「意義のある支援」	- .161	- .207	.020
N	173	173	173
F 値	1.89	5.37**	3.96**
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.032	.087	.066

\*\* p &lt; .01 \* p &lt; .05

#### Ⅳ．考 察

入所形態をとる障害者支援施設の生活支援員に、自閉症者の余暇を支援するときに行っている普段の対応における、自閉症者自身の余暇の過ごし方に対する有効性を問う全42項目中、平均値が2.49～3.92で、9項目が2点台（21.4％）、33項目（78.6％）が3点台であった。このことは、生活支援員が普段行っている自閉症者への余暇活動全般に対する支援を有効性が高いとまでは認識していないことを示唆している。

入所形態をとる障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）は日常生活を営む場であるため、生活支援員は自閉症者と日常生活の支障に対する援助を行っている。援助困難な自閉症者への関わりを円滑に進めるためには、その内面の心理的特性を捉えることが必要とされている<sup>6)</sup>。しかしながら、自閉症者は共感性が希薄なことによって他者とのコミュニケーションが成立しないことが多いため、その心理的特性を捉えることが難しく、日常生活で支障をきたすことになる<sup>7)</sup>。生活支援員が自閉症者の余暇を支援しても、自閉症者は他者とのコミュニケーションをとることに困難さを持っているため、自閉症者自身から余暇活動が充実している旨の感想を聞くことが少ない。このため、生活支援員には自閉症者が充実した余暇を過ごすようになったとの確証が得られず、余暇活動の支援の有効性が高いとまでは実感できないのではないかと考えられる。

発達的に見た自閉症の認知障害は発達の遅滞の障害として現れ、加齢とともに変化する。認知の構造は、自閉症という特徴を持ちながらも一人ひとり異なった発達をし、発達の過程の中で修復されたり不均衡さが目立ってきたりする<sup>8)</sup>。自閉症と診断され、共通した自閉症の症状があったとしても各々の状態像は異なるため、一人ひとりの状態を把握した上で各々に応じた余暇を支援することが求められる。したがって、第1因子「個人に応じた支援」は、自閉症者の状態に応じた個別的な余暇支援の有効性を捉える必要があるとの認識を表していると考えられる。

デンマークのバンク＝ミケルセンがノーマライゼーション（normalization）を提唱し、スウェーデンのベンクト・ニリエにより世界中に広められた。これは、障害があっても健常者と同様に当たり前に生活できる社会がノーマルな社会という考え方である。日本でもノーマライゼーションの考え方が広まり、居住型の福祉施設内で余暇時間の過ごし方に関するプログラムだけでなく、地域社会の中で余暇活動に参加することが求められるようになってきている。自閉症等発達障害児者は、活動する場所や関わる人間が制限されている<sup>9)</sup>。このため、福祉施設内だけでなく、地域社会へ出向いて余暇活動に取り組むことが求められる。したがって、第2因子「地域資源による支援」は、生活支援員が自閉症者の余暇活動において、地域の社会資源を活用し、余暇活動の幅を広げる支援の有効性を捉える必要があるとの認識を表していると推察される。

近年、余暇活動については、家庭や地域生活で楽しめる活動であり、目的性、主体的でなければならないとの見解がある<sup>10)</sup>。また、余暇活動においては活動スキルを習得させるだけでなく、本人の意向を考慮して自分なりの楽しみ方ができるようにしていく必要があるとされている<sup>11)</sup>。したがって、第3因子「意義のある支援」は、生活支援員が自閉症者自ら楽しみを見つけ、自主的に余暇活動に取り組むような意義のある支援の有効性を捉える必要があるとの認識を表していると考えられる。

生活支援員は、自閉症者に対する余暇支援の有効性を第1因子「個人に応じた支援」、第3因子「意義のある支援」、第2因子「地域資源による支援」の順に意識していることが示唆された。障害者支援施設を利用している自閉症の多くは知的障害を伴うため、言語理解の遅れを示すものが多い。言語の発達がみられても、他者のことばをおうむ返しする反響言語があり、相手の意図や周囲の状況に考慮した会話は困難である<sup>12)</sup>。生活支援員は自閉症者の行動に関して、自閉症者とのコミュニケーションが成立しないこと



によって、内面の心理的特性を捉えることに困難があると認識している<sup>13)</sup>。

このような独特な障害特性により、生活支援員は自閉症者の状態像を捉えるように努めるため、自閉症者の余暇を支援するにあたって、まずは「個人に応じた支援」を心がけることで情緒的な安定を図り、次に「意義のある支援」を心がけることで余暇活動の充実を目指しているが、「地域資源による支援」を考える余裕がない状況があると考えられる。したがって、自閉症者の余暇を支援する際、地域の社会資源を活用した支援が十分に機能していないという問題点があり、この点の改善を目指すためには障害者支援施設の人員配置の改善、自閉症者に対する余暇活動を充実させるための地域のネットワークの形成等、国や地域社会における政策レベルの対応が求められよう。

また、生活支援員は、自閉症者の余暇活動を支援することに対して喜び、達成感、及び満足感のある程度抱いていた。したがって、生活支援員は自閉症者の余暇活動を支援することを肯定的に捉えているようである。特に、個々の自閉症者の状況に応じた支援に対する有効性を捉えることが、自閉症者の余暇活動を支援することに対する満足感に影響を及ぼしていると示唆された。自閉症の社会的障害は、通常の一般的な学習の源泉や、他の人びとから得ることができる情緒面のサポートから遮断されるため、他の問題に比べるとはるかに深刻である<sup>14)</sup>。このため、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていくことを重視する必要があると指摘されている<sup>15)</sup>。個々の自閉症者の状況に応じた余暇活動を支援すると、自閉症者が情緒的に安定し、生活支援員や入所している自閉症者との交流を促す場面が増える。このような支援は、自閉症の対人関係の障害等の社会的障害の改善を図るものでもあるため、生活支援員は自閉症者の余暇活動を支援することに対して満足感を抱くものと推察される。

## Ⅵ．結 論

本研究によって生活支援員は自閉症者に対する余暇支援を次のように認識していると考察した。

- ①自閉症者に対する余暇支援の有効性を検討する場合、「個人に応じた支援」、「意義のある支援」、「地域資源による支援」の3視点から見ており、この順番で有効性があると認識している。
- ②自閉症者に対する余暇支援を肯定的に認識している。
- ③個人に応じた支援に対する有効性を捉えることが、自閉症者に対する余暇支援に対する満足感に影響を及ぼしている。

## 【引用文献】

- 1) American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th Edition Washington D. C. 高橋 三郎・大野 裕・染矢俊幸訳 DSM-IV 精神障害の診断・統計マニュアル 医学書院 1996
- 2) Rutter M, Schopler E Autism: A Reappraisal of Concepts and Treatment. New York, NY: Plenum Press 7 463 474 1978
- 3) Kasari, C, Sigman, M, Baumgartner, P, & Stipek, D, Pride and mastery in children with autism. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 34 3 52 362 1993
- 4) 松山郁夫・内田博昭 自閉症のライフステージにおける療育に対する直接処遇職員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(1) 205 214 2007
- 5) Baron-Cohen, S., Bolton, P. 久保紘章訳 自閉症の原因 「自閉症入門」 中央法規出版 51 61 1997
- 6) 石井哲夫 これからの障害者支援 自閉症の人への支援を实践して得たもの 教育と医学 慶應通信 54(12) 1092 1100 2006
- 7) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設的生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281 287 2008

- 8) 太田昌孝・永井洋子編著 自閉症治療の到達点 日本文化科学社 1992
- 9) 同上 6)
- 10) 太田俊己 知的障害教育における QOL 発達障害研究 21(2) 89 101 1999
- 11) 関戸英紀 中学校特殊学級における知的障害児に対する余暇指導 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学 1 35 48 1998
- 12) 松山郁夫・米田博編著 障害のある子どもの福祉と療育 建帛社 2005
- 13) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281 287 2008
- 14) Wing, L. 自閉症 (久保紘章・井上哲雄監訳) ルガル社 1997
- 15) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 309 316 2009

## 謝 辞

調査に際し、自閉症者の生活支援を行っている障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。